平成18年度第1回「海上の森運営協議会」会議録要旨

日時
平成18年9月12日（火）　13：00～15：15

場所
県庁西庁舎　第11会議室

出席者
加藤倫教委員　木村光伸委員　酒井立子委員　柴田健二委員　鈴木敏明委員
芹沢俊介委員　竹中千里委員　長江順造委員　マリ・クリスティーヌ委員

欠席者
内田臣一委員　只木良也委員　松尾初委員

１．あいさつ

伊藤　明　氏（農林水産部農林基盤担当局長）
マリ　クリスティーヌ　氏（あいち海上の森センター名誉センター長）

２．海上の森運営協議会の開催について

事務局
「海上の森運営協議会開催要領」を説明

３．議事

事務局
「海上の森の保全と活用の取組について」および「海上の森保全活用計画（案）について」を説明

委員
・綿密な計画だと思うが、海上の森を里山と位置づけるかどうかという大きな問題がある。
・里山とはいったい何なのかというところを明確にし、どのような保全をするのか、里山を保全するとはどういうことなのかということを少し詰めておく必要がある。
・里山とは何か、どういう里山の構造に持っていきたいのかを議論する、議論する場、議論に参加する人たちをきちんと保証していくことが必要。
・海上の森では今もなお、地権者の方々を中心に農業、林業を中心とした活動なさっている。その生活のあり方をどう保証していくのかということを片一方で考えなければならない。
・我々は、人間を除いた自然のあり方だけを見がちだが、海上の場合はそうであってはならな

い。例えば、去年、今年、イノシシが大量に出ていて、農作業そのものが立ち行かなくなるかもしれない。
・里山的管理が本当に行えるのか、里の生活を保障ならどれぐらいまで、自然に対して我々が積極的に手を加えていくのかということも考えなければならない。そういうところの見通しを少し、保全活用計画の中に位置づけていただきたい。
・今申し上げたことを、意識のどこかにとどめることができるような文案が少し加えられるとありがたい。

座長
・里山の定義で、非常に根本的な問題がまずご意見として出された。
・今の意見に対して同じような意見、そうでないといったのがあれば、この定義という話題で。

委員
・愛知万博のとき、里山ではないといわれながらも里山であり、何と答えればいいのかということが非常に難しい時期もあった。みんなで納得できる話に持っていかなければならない。
・アメリカのバージニア州にある、ウィリアムズバーグでは、１７００年代のアメリカ独立戦争前の生活を町が全部保全している。里山でないにしても、里山ふうの体験をできる１つの大事な勉強の場として、どこの時代の里山にこれを当てはめていくのかということと、体験をしながら、私たちの心が安らぎの場所であったり、自然環境を守ったりするということになる。
・自然環境を守るということは、ただ何もしないということではない。イランのカスピ海の近くではお米が取れ、そして、イノシシがたくさん出てくる。だから、地元でいのしし狩りをする。むやみに取るだけではなく、ちゃんとみんなでイノシシを食べ、無駄な死にしないようにする。捕鯨も、やたらと油のために捕っていたわけではなく、村１つがクジラ１頭をちゃんとみんなで食べてそれが供養されてという、そういうことも１つの生活だったと思う。
・里山の生活を、身近なところでみんなが実体験できると考えた上でひとつの大きな仕組みができてくると、来られる方々も、そういう歴史的体験もその中でできるのではないか。

委員
・私たち地権者は、毎日海上で生活している。弘法堂、多度社の祭礼など、伝統的な生活様式はまだ維持されている。
・私たちの先祖が住み着いてから、３００年近くあそこにかかわってきた。万博のときに、反対、賛成と、激震が走ったが、今まで失われたもの、心の中で思っているものをもう一度再考してみたいと思っている。
・方針案は、海上町地権者の組織名が載っていないなど、今後問題が出てくる。実行力のある小集団グループが欲しい。
・１ヵ月ぐらい前の集中豪雨で、坂が崩れて溝が深く掘れてしまい、車が１台ストップしていた。昔は、村民百数十人いたので、あっという間に補修できた。今は、それを具体的に、すぐに直すという人がいないので、結局、１０日、２週間ぐらいで瀬戸市が業者委託するか海上の

人間が善意でやっている。
・具体的な問題点を検証していき、実際的に改善し、小さなグループが常に機動力を持って対応すれば、すぐに万博以前の状態の水田がよみがえってくる。
・今、荒れ放題というのは、県が万博用に買い上げたところが多い。そこから、イノシシが出てきて、私の水田も全滅になった。
・人間がかかわらないといけないということ、伝統的な核になる部分、それをきちんとアピールしていかないといけない。
・全国的な里山モデルを海上に持ってきて移入しても、何の役にも立たない。
・今後とも、少数精鋭の実行グループがいたら本当に心強い。

座長
・かなり現実的な問題が出てきたが、伝統的な生活というところをもう少し紹介していただきたい。森林の使い方について。

委員
・江戸期より変わらない、稲作スタイルを継続している。
・屋敷林の維持管理ということが１つあったと思う。その間伐した木も炭にするなど、有効的に使って来た。イノシシの場合も、穴を仕掛けて、そこに落ちたイノシシを仕留めていた。
・里山の維持管理ということからいくと、マツタケなどのキノコは買うなどということは思っておらず、常にあるものだと思っていた。
・里山の維持管理をもう１回きちんと万博前の状態に戻す。さらに、田畑の状態を、昭和３０年代のように復元する。昔のように戻せるならば、夢のようなユートピアがまた再現するだろうと思う。動植物の数も多かった。そこにいる人間関係もすごくよかった。

座長
・そういう話だと、区域を区切って自然の推移、自然の状態で置いておくといったことと矛盾するのではないかと思う。人手が要るということが問題かと思うが、どうか。

委員
・この間、新潟県十日町の「キョロロ」というところに行ってきたが、非常にいい運営管理をしていた。そこでは、ボランティアさん、学芸員の方、生物学者の先生方がいて、森から取れたものを子どもたちにどういう触り方をすればいいかとか教えていた。それをまた今度森に返してあげるといった、そういう形でのふれあいをしていた。そういうことを少し、センターの中でできたら楽しいと思う。そして、そこから少し学んで、今度は海上の森の中で生物を観察するということがすごく大事になる。
・入門編から、自分もボランティア活動ができるような大きなプログラムができると、人々が育っていく１つの経緯にもなっていくのではないか。
・いきなりできる方々が来るだけでなく、長い目で見て、一緒になって何か作っていこうという気持ちになってくれると素晴らしい。

委員
・海上の森に行って非常に気になるのは水関係のこと。赤池は、瀬戸市から委員が出ているが、山口関係とかその辺がこの運営協議会とのかかわりでどうなっているのか。
・水関係のことが非常にこれから問題になると思う。赤池の方の吉田川が荒れたときの問題があったが、この運営協議会とのかかわりを事務局のほうから説明いただきたい。

事務局
・赤池の関係は吉田川があり、山口の地域の組合が水量等の管理をしている。
・水の需給関係については山口の方にお願いしている。こちらが調整するとかは今のところ考えていない。
・地域の水環境、水の需給も考慮しなければならないが、委員として入っていただくということまでは考えていない。必要があれば、また意見を伺うということは考えていきたい。

座長
・私が気になったのは、大学関係のかかわり、特に第５章の協働連携の推進というところで大学もいれていただきたい。
・私どもの研究室での、海上の森の湿地の水質調査や、隣の研究室でのシデコブシの遺伝生態学的な研究で非常に面白い結果が出ている。そういうのも市民の方に紹介できたらと考えている。

委員
・アメリカの学校で以前、プロジェクト・ラーニング・ツリー（PLT）という授業があったが、これは、森林保全や環境について学ぶワークブックを作って、これを各公立学校が要望すれば送って、ひとつの授業としてのカリキュラム作りをしている。
・資料３の中で７条に知事の権限と書いてあるが、もし知事が１つの串としてまとめることができるなら、各地域の、義務教育の間は各学年別に教科書を作って、自然学習という形で、センターをうまく活用できると生かされてくる。義務教育で学んでいる中に何らかの形で食い込むことがいいと思う。
・アメリカの場合、先生が「今年のカリキュラムはこうします」といって、その年度に決めてしまえばそれを入れることができてしまう。日本の場合、文部科学省のこともあるが、これを活用できるといいと思う。

委員
・私は愛知万博のときに、今の遊歩施設のところで皆さんをガイドする役割をしてきたが、今まで自然から遠かった方、一般の方に対する啓蒙など、そういった誘導をしなくてはいけない。愛知万博の理念を継承するうえでは非常に大きな役割を担っていると思う。
・私たちインタープリターが地元にもたくさん残っているので、地元のお子さんや、自然から遠ざかっている方々への誘導、ガイドを。できれば、今ある施設の中にいつもいられるような状況を作っていただけると非常によろしいのではないかと思う。

座長
・今の小学生等の体験の場としてのもう少し詳しい計画があれば。

事務局
・体験学習ということで「森の教室」などがあり、多くの方に参加していただくメニュー、プログラムを作っているが、当然お子さんたちも対象にやっている。
・学校との連携というのは、なかなか進まない状況がある。学校側では、学校単位で生徒全員を連れて行くということになると、その交通手段や、現場での対応といったところで難しい面がある。私どもは拒むものではないので、連携を進めていきたいと思っている。
・インタープリターやボランティアの方々との連携なども課題として考えている。例えば森の教室のリーダー役やセルフガイドブックの作成なども連携してお願いしている。瀬戸市のボランティアグループの方々からも、ぜひ海上の森にいろいろなボランティアとしての活動の場を作ってほしい、活動していきたいというお話があり、そういった方々とも今後いろいろな形で連携を深めていきたいと思っている。

座長
・教科書的な教材を作成するというような計画はあるのか。

事務局　・今のところないが、今言ったように、セルフガイドブックを作っている。これは遊歩施設を巡るにあたり、そのセルフガイドを見ながら自分たちでいろいろな気づきやふれあいができるという内容のものである。・ほかにハンドブックということで、「海上の森の自然観察ハンドブック」をシリーズで作ろうと思っている。１回目に作ったものは総集編みたいなもので、それとは別に、四季を通じて１つずつ作っていきたいと思っている。

委員
・この活動自体が、専門分野に細分化していくという意味になる、そのプラスとマイナスがあることを考えねばならない。それぞれの専門性は満足させても、それが全体として里山の中に機能しなくなっては困る。
・今みたいに組織が大きくなればなるほど、実行に移す段階で時間が無駄に流れていく。大きな流れを作る組織は必要であろうが、それはセンターと地権者の会が担うことだと思う。しかし、現在はその日その日の効き目のある動きが必要で、細分化する場合には、それを有機的に結びあわせるようなことができているのかを検証することが必要であると思う。
・森林のほうのエキスパートは、大変優れた能力のある方たちが県の中にいるが、ただ、木を伐採したり、その名前を確認したりすることが、里山の維持管理活動と結びついているとは必ずしもいえない。
・県にお願いしたいのは、それぞれの活動を細分化すると同時に、それを相互作用の中で見ていくということ。もしそれが機能しないというのであれば、日常活動のできる、機動力のある小さなものを同時に持って、車の両輪みたいな形で運営していかないと里山の維持管理は難しいのではないかと思う。

事務局
・現在、海上の森の会ということで、県と協働していろいろな取組を進めていただいているが、海上の森の会には運営会議等もあり、会には活動グループがいろいろと作られている。大きな取組と個々の取組としては、海上の森の会の方にもいろいろと活動していただいているが、即実行できるかというと、なかなか集まりにくいので難しいところもある。
・農地の維持管理については、海上の里づくりの会という地元の方を中心とした方たちに委託でお願いしている。ただ、急な台風、土砂の入り込みや、イノシシ対策などにすぐ対応できるかというと、今のところ委託の範囲に入っていない部分もある。
・今後もう少し、臨機応変な対応が取れるような仕組みも考えていきたい。そのためには、人の協力を得なければならないので、地元を中心とした活動の輪が広がるように考えていきたい。

委員
・実は今朝、メールが回っていて、イノシシの問題で柵の補強をしたいと。ついては竹切りを早急にしたいので、出られる人はすぐ出てくれと。そういう活動に参加できる人が出てきてやるということになるかと思うが、そんな形で、やらなければいけないものはやれる人がやるということではじめなければしょうがないと思う。
・何か事が起こったときに、「では次に会議をやってみんなで集まって考えましょう」ではどうしようもない。即応体制の執れる組織づくりを海上の森の会はぜひやりたいと思う。
・今回の保全活用計画は総合計画みたいなもので、ありとあらゆることが書いてあって、悪く言えば重み付けができていない。
・もう１つは、時間軸が入っていない。時間軸と作業の順番を、少し見えるような形にしておくといいという点がある。
・「みんなの森を多くの人の力で」、というのがキャッチフレーズになってくるが、その「多くの人」とは誰なのかを明確にしていく必要がある。
・海上の森を県が管理するのは大前提だが、その実行部隊は、プロの人たちに入っていただく以外にはない。大変だが、人材を確保して年次ごとの計画に沿って作業を進めていかなければいけない。広葉樹林も針葉樹林も同じことが言える。
・それとともに、それに対するボランティアサポートというものが多分できる。プロではないが、海上の森に貢献したいと思っている方々がたくさんいらっしゃる。そして実際には、海上の森で楽しみたい、学びたいという人たちに対するプログラムをどう詰めていくかという話なのだと思う。それをどう作っていくかという１つの見通しが必要。
・先ほどガイドブックの紹介をいただいたが、そういうガイドブックができていくプロセスで県民、市民がどれくらい参加しているかということが大事。プロセスを海上の森センターとして、きちんと開示していただく。知るだけでも随分協力の仕方が違ってくる。
・そういう意味では、これは活動教育の全体の中を網羅的に書かれているが、時間軸に沿って少し見せていただくこと、参加者をきちんと明確に区別しながら、誰を対象、あるいは誰から誰に何を受け継ぐのかということが少し見えてくるととてもありがたい。　・保全活用計画の実行プログラムみたいなものがまたさらに要るのだろうと思う。

委員
・里山の問題を考えるうえで重要なことは、里山の姿は地域、時代によって違うということ。
・海上は里山かという話があったが、里山の一般的なイメージは、関東の武蔵野の雑木林がベースになっていて、伐採を繰り返しながら萌芽林を育成するのが基本。しかし、愛知県は土地がやせているので、そんなことをしたらやせ山が成立してしまう。
・つまり、愛知には愛知の里山がある、関西には関西の里山がある、九州には九州の里山があるということ。そういう意味では、海上は少なくとも、しばらく前までは里山であった。
・海上の集落が中心となって、その周辺の生活に利用する林ということで里山が成立していたが、このあり方を決定的に破壊したのが愛知万博。つまり、愛知万博で土地の買収をかけて海上の集落を崩壊させた。ずっと続いていた里山を決定的に壊したのは、ほかならぬ愛知万博である。ここは理解しておかないといけない。
・ただ、博覧会がなかったとしても、今後１００年もったかどうかはわからない。生活様式が変化して、最終的には無人化してしまう。そういうところは日本中いくらでもあり、いつまでも続くわけではない。
・新しい里山は何かというと、やはり都市近郊林だと思う。極端なことを言えば、名古屋という大都市とその近郊の山という意味での里山。これからそういうふうに変質していかざるを得ないとすればどうしたらいいのか。
・今日は非常に困難な課題がいろいろ示され、そういう点で里山は時代によって違う。昔の里山を復元しようとしても、時計の針を逆に回すのは無理な話でどうしようもない。
・これからは、都市近郊林としての役割をどう創造していくか、それが海上地域の活用を考えるうえでの一番の課題ということを改めて再確認したい。

委員
・たまたま海上にかかわった平成７年の当時は、まだ開発するというときだったが、このように保全されるということになり本当によかったなと思っている。
・今、愛知県の県有地もかなり開放型になってきて、ここでは海上の森が中心になるが、できるだけ広く、垣根を低くしてたくさんの方がやれればいいと思う。
・先日も新聞か何かに載っていたが、ここでも共生大学みたいな話があるが学んでも具体的に活用、実際にやる場がなかなかないということがあるので、ぜひ海上の５３０ヘクタールでいろいろなことを学んだ人が実際に森にかかわる、この場を使えるというようにしてもらえるのがいちばんいいのではないかと思う。なるべくオープンにして、何をやっているのかをはっきりわかるような形にして、なおかつ取っつきやすいというふうになればと思う。
・生態系保護地区がかなりの部分で設定されたが、そういうところがいろいろかかわりにくい場所になる可能性もある。その辺を環境部とも連携して、うまく我々がかかわれたらいいと思う。
・いずれにしても、５００ヘクタールを超す広い面積でいろいろな部分があるので、将来にわたって皆さんにうまく活用していただければいいのかと思っている。

委員
・先ほどの話の都市近郊林、そういう認識でこれから整理していく必要があるが、考え方を２つの立場で見ておく必要がある。
・愛知県民にとっての海上の森、これは県としては当然の姿勢。できるだけ開放していこう、これはとてもいいことだが、３００年の歴史をもつ海上集落との関係がなくなったわけではないことも事実。海上の森が５３０ヘクタールで県有地が５１０ヘクタールであるという、数字の上に非常に厳しく表れていることで、その差の部分をどんなふうに考えていくことをしっかりとみんなで見据えていかなければいけない。
・もう１つは、海上の森は５３０ヘクタールのうち５１０ヘクタールは県有林だが、瀬戸市の海上町であること。本当は瀬戸市の行政的な配慮とか計画がかなり具体的に必要なのではないかという気がする。もう少し積極的に市がかかわっていただけるとありがたい。
・それから、自然環境保護のゾーンができ、大変厳しい保全の制約がかけられているが、そこをどうするかということはこれから大きな問題になる。今日は環境部の方は来ていらっしゃらないが、行政組織としては別なのだろうが、海上の森は１つなのでやはり同じ場面で見続けていく必要がある。次回からは委員でとは言わないが、きちんと同席していただきたい。
・私ども海上の森の会は、ずっと海上の森の活用、あるいは利用に関して占有しようと思っているわけではない。あくまで、地域と密着しながら海上の森の歴史を大切にしながら進んでいくというスタンスなので、その辺はご理解いただきたい。

委員
・イギリスにナショナル・トラスト制度というものがある。１８００年代の終わりに、産業革命によってイギリスの里山に人が住まなくってしまった。それで、イギリス・ナショナル・トラストという組織が、湖水地方の土地を買い集め、もともとそこに住んでいた農家の方々にとても安い金額で貸した。そして、そこの地域がちゃんと生きている地域としてそのまま保全、コンサベーションしていくというもの。話を聞いていると、海上の森もそういう形の動きもできる感じがする。やはり生きている場所でなければ本当の里山とはいえない。
・里山ふうの生活をされていくためには、やはりプログラムが必要。大勢の方々がそこに訪ねていったときに、地中海クラブのように「今日はこういうことをやりますが、参加者はどうぞ」というコーディネーションができる方がすごく大事だと思う。
・例えばロンドンでは、２週間の湖水地方の、ある意味ではひとつのホームステイみたいなプログラムがあって、そこで寝泊りをしながら湖水地方の石塀を積んで直す作業を教えてもらう。ただお手伝いに来るだけではなくて、何か学んでそれを持ち帰る。持ち帰ることでそこに交流ができる。そういう相互関係だと思う。
・要するに、大きなプログラムみたいなものと、プログラムコーディネーターという役割を海上の森センターが持って指導するというより、むしろファシリテーターとして、やりたい人、してもらいたい人をコーディネートしていくような形だと思う。県が全部やるのではなく、やりたい方々が自由にできる、やりやすい環境づくりをすることをひとつの課題として考えないとどこかでぶつかると思う。

・賛成も反対もいろいろあるが、ひとつだけ共通しているものは、よくしていきたいという気持ちがあること。その手法がみんな違うと思う。目標のためにはたくさんの道があるということをどこかで示さないといけない。イギリスのナショナル・トラストの手法をうまく取ることができたらいいという感じがした。

委員
・ナショナル・トラストをそのまま持ち込もうと思ったときに、いちばん難しいのは後継者がいないこと。後継者がいないという状況を、センターが何らかの形で補わない限りは難しい。
・外から人を連れてくるにも、チェーンソーワークみたいなものは、プロ、若い人もいるが、農業用の水路などは昔ながらの素掘りの水路そのものが絶滅状態なので、維持管理するテクニックはもう日本から消えてしまっている。
・今の伝統の技を伝えようにも、担い手そのものがいなくなっている。そこをセンターで補ってほしい。それが、これからの里山を考えていくうえで重要なポイントではないかと思う。

事務局
・今、各種プログラムを作っていて、専門分野の方にお願いして講師役でやっていただいている。地元の古い技術を持っておられる方にも、ご指導をいただく形も考えてやっている。県民の方がいろいろな形で参加し、担い手になっていただきたい。若い人につなげていくような形をセンターとしても考えていきたい。
・住んでいる人にお願いするというのはもう無理なので、多くの県民の方にご参加いただき、その中から１人でも２人でも携わっていただけるような人を、人材育成といった形で育てていきたいと考えている。そういう人たちが、海上の森だけでなく、そこで学んだことを自分たちの地域でも生かしていただく。そういった輪が広がっていくことを願っている。

委員
・前に海上の集落、銭屋鉱産跡地のところに県の施設があり、そこで海上の県有地を山巡査とともに維持管理していたと思う。将来的な話なのだが、県の農林水産部の職員が海上に来てもらい、子育てもしながら技術を習得し、エキスパートとして活躍できるような人が良い。共通の活動範囲は広がる。
・出て行った人について言うと、陶器を焼いていた人が２軒、家も建てた人が３軒。十何人の古い海上の文化を持っていた人が、この１８年間の中でみんないなくなってしまった。いずれにしても、自分の子どもも、もちろん後継者になってほしいと願っている。生活感を共有する少人数の入村は将来的には考慮される。
・伝統文化のほうでは、上げ馬神事に使った馬道具などもあるわけで、祭りを司った人たちの心意気みたいなものが感じられる。もし可能ならば、そういうものも復元して伝えるならば、もう少しみんなにアピールできるかもしれない。
・この県のプログラムだけでは、全国的な里山のようになってしまう。つまり、学者、文化人、

マニアが「海上を使う」ことが中心になってしまうので、是非とも地権者の思いをプログラムの中に入れてほしい。

委員
・愛知万博記念公園（モリコロパーク）で行われるテーマ活動との提携は忘れないでほしい。向こうは管理部局が建設部の公園緑地課で部局が違うが、モリコロパークで行われる里山保全活動との連携を忘れないでほしい。

委員
・保全活用計画を見ていると、センターがこれからどんな動きをしていくのかということがあまり見えない。
・気になるのは場所で、センターの位置が「こんなところでいいのだろうか」という話がずっとあった。
・ひとつ心配なのは、センターが里のほうと離れていって、野鳥・古窯の森がすぐ東側に位置していること。
・実際に自分がかかわってやれたらいいと思っているのは、広久手第一池の辺りで、あそこはむしろ切り開いたほうがもっと昆虫類も増えるのではないか。
・鳥をやっているものから言うと、奥のほうへはあまり入ってほしくない。むしろセンター周辺で、楽しく自然観察できる場所を整備できたらという気持ちがある。

座長　・今日の意見を加味した修正案に期待したい。

４．　その他

事務局
・あいち海上の森センターの愛称等、および開館記念事業について説明

以上